過去を買う男

曽田　圭

1

明日から四月とあって、お濠に沿って植えられた桜はすでに開花を始めていた。ライトアップされた城の明かりに照らされ、なかには散り急ぐ花びらもある。

自宅は市の北西部、庄内川を渡ったところにある古谷慎一郎にとって名古屋城を見ながらの帰路は若干遠回りになる。だが、タクシーに乗って行き先を告げたあと、ふと思いつき、無理を承知で運転手に迂回を頼んでいた。明日からは第二の人生が始まる。ほんの一時の気休めかもしれないが現実から離れ、夜景が織り成す幻想的な気分に浸りたいと思った。

この地域に生まれ育ったが、これまでライトアップされた城を近くから眺めたのは二〇年ほど前に一度だけ。あのときは確か何度目かの結婚記念日、わずかな時間であったが妻を家事から解放させたくて、そのまま向かいのホテルに一泊した。

「お客さん、今夜は送別会でしたか」

チラッとルームミラーに眼をやり、同年代くらいの運転手が気さくに話しかける。

「わかります？」

「時期が時期ですし、それにその花束、どう考えたって送別会でしょう」

古谷は苦笑いを浮かべながら座席に置いた花束に眼を落とす。チューリップにスイトピー、ほかの花も交じっているのはそれくらい。送別会が終わりかけたころになって、全行員を代表して支店の中で最も若い白鳥小雪から手渡された。

古谷が勤める銀行は県内を地盤に一〇〇を超す店舗を構える。本店は市内にあるが勤務経験はなく、各店舗を転々とするうちに定年を迎えた。最後の勤務は名古屋駅に近い名駅第二支店。新幹線乗り場に近く支店長といえば聞こえも良いが、立地的には駅の裏。ホテルと小規模な商店が建ち並ぶ一画に位置しており、一等地にある駅前支店には預金高、貸付高ともに遠く及ばない。むろん規模に比例して行員数も二〇名と、地方に点在する店舗とさほど変わりない。

「運転手さん、ちょっとスピードを緩めてもらっていいですか」

道路の左側には妻との思い出のホテル、懐かしさが蘇っていた。断わられるかと思ったが、意外にも運転手からは思いがけない言葉

が返ってきた。
「構いませんよ。だったら後続車の迷惑になりますので、どこか適当な場所に停車させましょう」
タクシーにとっては時間と距離とが生業、仕事の邪魔をするつもりは露ほどもない。
「何もそこまでは―」
古谷は慌てて手を横に振る。だが、運転手に頓着する気配はない。
「私の心配をされているのですか、そんな気遣いなら無用に願います」
話しながらも筋違い橋手前を右に折れ、狭くなった道路を注意深く走り続ける。両脇にズラリと縦列駐車された車は花見客だろうか、どこにも空きスペースはなさそうである。
「ちょっと離れましたが、なぁに少し歩けば済むことです。もっとも中年男が肩を並べて夜桜の下を歩いたところで絵にはなりませんけどね」
それでも運転手は軽口を叩きながら、かろうじて一台停められるかどうかといった隙間に車を割り込ませた。
「さあ、降りてくださって構いませんよ」
運転手が後部座席のドアを開けて降車を促がす。古谷は言われるままに腰をずらしながらフロントのネームプレートを盗み見た。姓は星、名は「ちとせ」と読むのだろうか千歳とある。まさか偽名とは思わないが、なにやら嘘っぽい名前である。
「ご承知のとおり車内は禁煙でしてね」
古谷が車を降りると、すでに運転手は外に出て咥えたばこを手で覆い火を点けていた。少し早い気もするが春一番だろうか、日が暮れかけたころから風が出ている。
寄り道に徐行、それはこちらから頼んだ。だが、駐車まで頼んだつもりはなく、いくら後続車への配慮であっても何か釈然としない。新手の強盗？　それにしても客がタクシーの運転手を襲ったという事件は聞くが、その逆は聞いたことがない。
「車を離れて大丈夫ですか」
「ええ。一応、ロックしておきますが心配ないでしょう」
不安げな古谷とは対照的に運転手は平然としている。向き合うのは初めて、いまどき珍しい胸にエンブレムの付いた濃紺のジャケットに同色のネクタイを締めていた。精悍な風貌をしているが、よく見ると目尻に複数の年輪が刻み込まれている。口振りから同年代かと思ったが、思いのほか年上かもしれない。それにしてもプロだから当然かもしれないが運転技術は年齢を感じさせない。いまの駐車だって、もし古谷がハンドルを握っていたとしたら、あれほどスムーズには行かなかった。

「城の近くまで行ってみましょうか」
たばこを靴先で揉み消すと、運転手は返事も待たずに公園の中へ足を踏み入れる。横に細長い公園の向こう、お濠を挟んで右手に本丸、鉄柵に沿って人が一人通れるほどの遊歩道が続いていた。ここまで来て、いまさら逃げ出すわけにもいかない。
「運転手さんにはノルマとかはないのですか」
「まあ、あるにはありますがね。私には別次元の話ですよ」
後ろから話しかける古谷に運転手は前を向いたままで答える。お濠には本丸からの明かりが栄え、影になる城下の石垣は闇の中に佇んでいた。
「失礼ですが今年で定年を迎えられた？」
「ええ、まぁ」
古谷は曖昧ながらも返事に親しみを込めていた。自分でも信じられなかったが、いつの間にか警戒心が消えていた。幻想的な夜景もさることながら、この男には何か他人を惹きつける魔力のようなものが潜んでいる。
「サラリーマンは大変ですね。働くだけ働いて定年になったらハイさよならですから―」
「運転手さんは？」
「私ですか、私は定職に就いたことはありません」
てっきりサラリーマンからの転職かと思ったが、いとも簡単に運転手は古谷の推測を否定する。ならば現在の職業は定職ではないのだろうか―。
「余計なお世話かもしれませんが、これからどうされるのですか」
ふと立ち止まり、運転手が天守閣の方角を見上げる。つられるように古谷も立ち止まり、同じ方角を眺めていた。
「とりあえず一、二年は充電して、それから先はそのときになったら考えますよ」
「でも、ブランクができると、あとが大変だって聞きますよ。競走馬だって休養明けは走りませんからね。もっとも、それも調教次第かな」
顔は見えなかったが、なにやら嘲笑されているような気がした。四〇年近くも同じ職場で働いてきた人間と、わずか数年でターフを去る競走馬とを一緒にされてはたまらない。
「これでも再就職の誘いはあったのですがね。それに縋るのも未練かと思いましてね」
初対面の男に、なぜこのような話を打ち明けねばならないかと、疑問を抱きながらも古谷は挑むように続けた。気づかないうちに男の挑発に乗せられていたかもしれない。
「だってそうでしょう。この歳になるまで働き続け、わずかばかり

の休養をもらったとしても罰は当たらない。違います？」
カード会社、関連の金融業者など人事部から紹介された再就職先は片手に余る。だが、いずれもポストが納得できず、まして店内顧客の案内係など勤まるはずもなかった。同じ肩書きでも役員に近い駅前店の支店長として最後を迎えていたら、おそらく待遇も違っていたであろう。一〇年前のちょっとした躓き、確証はないが、いまでもあれがその後の人事面での不遇につながったように思えてならない。
「よろしかったら、もう少し話していきませんか」
古谷の気持ちが通じたかどうか、男は振り向くとボソッとした声で言い、少し離れたところに見える東屋風の休息所に足を向けた。それにしても道路脇には数え切れないほどの車が駐車されてあったのに、どこにも人影が見当たらないのはどうしたことだろう。
「掛けませんか」
怪訝そうにしながらも後をついてきた古谷に男が勧める。広さ六畳分ほどの休息所、腰の高さくらいまでが板で囲まれ、その内側には出入り口を挟んで「コ」の字型のベンチが取り付けてある。向かい合わせに腰掛ける男の背中の後ろには一際大きな桜の木、早咲きなのであろう、肌寒さを増してきた夜風が休息所の中にまで花びらを運び込んでいた。
「お客さん、これまでの人生、悔いはなかったですか。たとえば、あのときはこうしておけばよかったなんて―」
「そんなの多かれ少なかれ誰にでもあるでしょう」
気のせいか男の口調が急に尊大になったように感じられた。感傷的になっていたのは事実であるが、それを嘲るような物言いに古谷は苛立ちを覚えた。
「そうですよね。しかし誰もが人生、やり直しは利かないと諦めている」
「やり直し？」
「いや失礼、口が滑りました。誤解のないように申し上げておきますが、やり直しは利きません。ただしプレイバック、再生は可能です。ご自身が過去の自分に向き合う形でね」
「過去？」
からかわれていると思った。だが、男の顔つきは妙に真剣であり、運転を投げ出してまで見ず知らずの他人に付き合う人の良さ。不器用ながら他愛ない冗談で、こちらの気持ちをほぐそうとしているのかもしれない。
「それで、その過去とやらは、どのように再生するのです？」
これも束の間の余興と考え、古谷は苛立ちを抑えて男の冗談に付き合うことにした。

「とりあえず一日がひとつの単位になっていますので、午前０時がリセット時刻であると認識してください」
男は新しいたばこを取り出し、探るような目付きで古谷を見つめる。
「午前０時がリセットタイムですね。それで？」
男の意図は読めなかったが所詮は余興、古谷は理解できたふりをして先を促がした。一度も試されたことはないが、もし催眠術をかけられるとしたら、こうした心理状態に陥るのかもしれない。
「それだけです。あとはあなたが戻りたいと希望される日を指定されれば契約が成立します。申し上げるまでもないと思いますが、そのときは契約金を頂戴することになります」
「契約金？　ですか」
「ええ。あなたは過去に遡ってしまわれるわけですから当然、契約金は前払いでいただきます。でないと、この日が来るまで私どもはあなたを待ち続けなくてはなりません。それでは不公平だと思われませんか、時は金なりですからね」
淡々と話しながら、ようやく男が弄んでいたたばこに火を点ける。返す言葉が見つからず、古谷は呆然と男が吐き出す紫煙の行方を眼で追っていた。天守閣の上、金の鯱の向こうには上弦の月、さらにその周りにはいくつかの星が瞬いている。古谷は男の名前を思い出していた。男の言動だけでなく、すべてが虚構のように感じられる。だが、瞬きを繰り返してみても風景が変わることはなかった。
「ちなみに契約金は一日当たりが一万円、仮に一年ですと本来は三六五万円になりますが、そこはボランティア、わずか一〇万円とさせていただいております」
男は表情も変えずに訥々と語るが、競走馬に例えられたときと違って今度は古谷の方が嘲笑する番であった。
「わかりました。じゃあ、私は一日分の契約をさせていただきましょう」
古谷は腹の中で笑いを堪えながら内ポケットの財布を取り出す。たとえ詐欺だったとしても、ここまで付き合い、さらに落ち込みかけていた気持ちを和ませてくれた礼と考えれば安いものである。
「領収書はないのですか」
一万円札を受け取る男に向かってたたみかける。さっきはからかわれた気分にさせられた。そのお返しのつもりであったが、どうやら男には通じなかったようである。
「なにせ形がないものですから―、私を信頼していただくほかありません」
確かに余興とはいえ取引は雲をつかむような話であった。だが、男が手にした札には形がある。皮肉のひとつも言いたかったが、そ

れを口にするとせっかくの心地良さが帳消しになってしまう。古谷は納得したふりをして小さくうなずいていた。

家の前でタクシーを降りたときには一〇時を回っていた。普通なら三〇分ほどの距離だから今夜は倍以上の時間を要したことになる。それにしても駐車している間はメーターが倒してあった。詐欺まがいの行為は別にして、案外良心的なタクシーに乗り合わせたのかもしれない。

車内に花束を置き忘れたことに気づいたのは玄関を入ってから。慌てて外へ出てみたが、そのときにはタクシーは走り去ったあとであった。

「何を慌てているの？」

妻が怪訝そうな顔で出迎える。六年前までは家族四人で住んでいたが、娘が嫁ぎ、さらに電機メーカーに就職した息子は東京にある本社勤務となり、いまは夫婦だけの暮し。そうなると両親が健在だったころに建てた家なので空き室ばかりが増える。そのうえ三〇年余り連れ添ったいまになって、たった一人残った同居人からも別居を宣告されていた。

「お風呂にする。それともビールでも出しましょうか」

妻が退職後の熟年離婚をにおわせたのは半年ほど前。以前から考えていたそうだが性格なのだろう、接し方はもとより家事すべてにおいて、それまでと何ら変わったところはない。唯一の変化は妻が娘の部屋で休むようになり、寝室のベッドがひとつ空いたままになっていることくらいである。

「勝手にやるから先に休んでくれたらいいよ」

ねぎらいのつもりだった。今夜にでも離婚を切り出されるのでは身構えたが、妻は「じゃあ、そうさせていただくわ。後片付けはいいから、火の始末だけはお願いね」と、思いがけなく素直にダイニングルームを出て行く。ひとまずの難関は切り抜けたようである。もっとも妻の口振りからすると問題は夫婦仲にあるのではなく、その形態と自我にあるらしい。初めての外国旅行、すぐにでも誘うつもりで預金を解約したが、妻の本心が理解できないうちは本当の意味での解決にはつながらない気もする。

2

長年の銀行員生活で身に付いた習性は一朝一夕には変わらないようで、いつものように次の朝も六時前には目を覚ましていた。今日からは仕事に行く必要はないと頭でわかっていても体が勝手に反応する。寝返りを打ってみても事態は変わらず、しばらくの間、ベッドの上で悶々としたあと諦めて階下へ降りた。

「あら、今朝は少し遅かったわねえ」
トイレを済ませ、顔を洗ってからダイニングルームへ行くと、朝餉の香りと一緒に妻の爽やかな声が飛んできた。きのうの朝と同じ声、別れ話を持ち出しておいて、いかにも彼女らしい屈託のなさ。きのうはサラリーマン生活最後の日とあって、いつもより時間をかけて歯を磨き、さらに入念に髭を剃っていた。
食卓には焼き魚と味噌汁、そのうえに好物の漬物と御飯が並ぶ。御飯は白米ではなく赤飯―、きのうの残りかと思ったがそうではなさそうである。なにやら様子がおかしい。
「退職祝いよ。夕食にと思ったけれど、今日は送別会で帰りが遅いでしょう」
頭の中を整理できないでいる古谷に妻の注釈が拍車をかける。ふと思いついて古谷は玄関へ走った。郵便受けから新聞を抜き取り、もどかしげに日付を確かめてみる。三月三一日月曜日、一面のトップは脱走米兵によるタクシー運転手殺人事件の続報―。ほかは広げなくてもわかっていた。経済面には携帯電話次世代機の規格統一、社会面には間違いなく大使館職員の金銭癒着記事が掲載されている。
「どうかしたの？」
ダイニングルームへ戻ると、妻が点けっぱなしになっていたテレビを消してから振り向く。きのうも同じように不審がられたかどうかは記憶にない。ただ、食事中に電話があったことは憶えている。
「いや、なんでもない」
「だったらいいけど、今日が最後なんだから、そんな浮かない顔していちゃだめよ」
何もわかっていない妻が訳知り顔で言い、赤飯が盛られた茶碗を自ら手にする。昨夜の出来事を説明したところで、おそらく「変な夢でも見たの？」くらいで片付けられてしまうに違いない。新聞で確かめたはずの古谷自身が何かの間違いではないかと、いまも信じられない気持ちでいるのだから無理もない。
電話の着信音が鳴ったのは茄子の一夜漬けを味わっているときだった。相手は車で一時間ほどの岐阜市内に住む娘―。
「今度の日曜日に幸が茜を連れて遊びに来るって」
電話を終えて戻ってきた妻が抑揚のない声で言い、それからも気持ちとは裏腹に「何もこんなに朝早くから電話をしてこなくてもいいのに―」などとぼやく。幸は娘、そして茜は今年五歳になる孫娘、二人の来訪を何より心待ちにしているのは当人自身である。娘は嫁いでからも仕事を続けており、その一方では趣味も多彩で奔放に暮らしている。むろん夫の理解あってのことだが、妻の自立願望の背景に娘の存在が見え隠れする。だからといって年甲斐もなく、など

と一笑に付せないところにジレンマがある。
「会社があるし、茜を幼稚園まで送って行かなきゃならないから、きっと出かける前に電話してきたんだよ」
食事中に電話が鳴り、その相手は間違いなく娘―。そのときになって半信半疑だった古谷の中で、昨夜のタクシー運転手の言葉が初めて確信に変わった。午前0時がリセットタイム。こんなことなら昨夜、じっくりと株価を調べておくべきだったと悔やむ。きのう一日の値上がり率が高い銘柄をデイトレーダーよろしく売買すれば儲けは確実である。もっとも事前に情報を入手できたわけだからインサイダー取引に抵触するかもしれない。それに退職金は来月になって振り込まれるから、いまのところは積立金を解約した金と、わずかばかりの蓄えしか持ち合わせていない。それでもかすかな期待を込めて確かめてみた。
「きのうの夕刊、見せてくれないか」
「何を惚けたことを言っているの。最後の出勤だから動揺するのも無理はないけど、それにしても今日のあなた、どこか変よ。きのうは日曜日だったから夕刊は休みじゃない」
妻が侮蔑するような眼差しを向ける。会社人間が退職の日を迎え、気持ちの整理ができなくて健忘症にでもなったのではないか、などと勝手に想像を巡らせているかもしれない。
勤務先までは乗換えを入れて地下鉄で四、五〇分。覚悟を決めて三月三一日を繰り返すとしても、念のためにビジネスバッグの中を調べる。やはり昨日、常務から受け取ったはずの辞令はなく、それに解約したはずの積立金も消えていた。そうなると九時までに本店へ出向かなければならない。すでに後任の支店長が古谷のデスクに納まっており、店舗へ行ったところで自分の席はない。長い一日が繰り返されるとわかっていたが、それでも古谷は辞令と積立金を受け取るため、きのうと同じようにいつもより早めに家を出た。
地下鉄の中、きのうの顔と今日の顔、どの顔も同じに見える。ただひとつ明日になったら、この中から自分の顔が消えているであろうことだけは間違いのない現実であった。
「再就職先、すべて断わったんだって」
いつも苦虫を噛み潰したような顔をしている常務が退職辞令を手渡しながら白い歯を見せる。一般行員の辞令は人事担当の常務室で交付されるのが慣例になっていた。
「君らしいといえば君らしい。まぁ、これからも何かあったら遠慮なく相談に来たまえ」
常務は古谷の肩に手を置き、この日のために準備していたような笑みを浮かべる。儀式はそれだけだった。古谷の後ろには同期入行

組の連中が控えている。彼らにも取って置きの笑みを投げかけるつもりであろう。

思えば一〇年ほど前、この常務が審査部長のポストに就いてなかったら、それからの経歴は違ったものになっていたかもしれない。バブルの崩壊を受け、当時の金融機関は俗に言う貸し剥がしに貸し渋りが横行していた。当行も例外ではなく、地方都市で支店長をしていた古谷も融資には神経を尖らせていた。だが、一方では担保物件の下落と零細性を理由に将来ある優良企業までも門前払いする方針に疑問を抱いていた。甘いかも知れないが、それでは地銀としての使命が果たせないのではないかと憂慮していた。むろん当行の自己資本比率は承知している。だが、担当する店舗の顧客は地域性もあり、その多くが脆弱な中小企業と個人とで占められていた。直接、反目し合った覚えはないが、そうした考えが審査部長の不興を買ったとの思いは拭い切れない。

全員に辞令が行き渡ったころになって顔を出した頭取の簡単なあいさつで退行式はあっさり終わった。本年度の定年退職者は二〇名前後、本店の裏玄関を出たところで感慨は胸の内に秘めたまま、それぞれが短い会話を交わしながら最後の勤務に散って行く。親密に語り合えば愚痴になると誰もが悟っている。

名古屋駅に向かう地下鉄の中では鈴村と一緒になった。鈴村は名古屋駅でＪＲに乗換え、西三河地方にある店舗で最後の業務を終える。

「いまさら戻ったところで仕事なんてないけどね」

鈴村が薄目の唇を歪めて笑う。冷淡に見えて損すると思うが、入行時からの癖は最後まで直らなかったようだ。彼の自宅は勤務先に程近い農村地、規則だから非効率的でも仕方ないが、今日は短時間で本支店間を往復させられている。

「家業を継ぐんだって？」

「まぁな。これまで女房と親戚任せにしてきたからな」

「でも、お前に農作業なんてできるの？」

「そんな大層な仕事じゃないよ。田畑といっても猫の額ほど、それに遊んでいるように見えても休日には手伝っていた」

古谷が得た情報では退職者の約半数が再就職、残りは自分を含めて明日から職を失う。そんな中で家業を継ぐ者、まして農業への転職は鈴村くらいであった。

こちらまで出かけることは滅多にないので、もし気が向いたら誘ってくれ、気晴らしついでに出てくるからと、また唇を歪めながら手を振る鈴村を改札口で見送り、支店に戻ったのは一〇時半。後任の支店長は来客中で相手も顔見知りだったが、古谷は軽く会釈しただけで二階の会議室へ直行した。

ほとんどの引継ぎが先週の半ばで終わり、自らが申し出て会議室に居場所を移した。すべての行員が一堂に会すると手狭で息苦しさも感じるが、隅の席に一人でポツンといると、なにやら取り残された気分になってくる。

「おかえりなさい。早速ですが昼食、出前にされます。それとも外へ出られます？」

戻ったところを見ていたのであろう、しばらくしてノックの音とともに白鳥小雪が姿を見せた。入行して三年目の春を迎えるが新人の配置がなく、いまでも支店の中では一番若い。会議室へ移ってからというもの、わざわざ古谷を訪ねてくるのは後任の支店長と彼女くらいである。業務に差し支えるからと注意するのだが頓着する様子もなく、ときには甲斐甲斐しくお茶まで淹れてくれる。

「あのぉ、お預かりしていた支店長の通帳ですが、お返し致しますので領収印をいただけますか」

昼食は外で済ませると、立ち上がりながら伝える古谷の傍らに小柄な小雪が歩み寄る。短大を出て入行したから二二、三歳になるはずだが、肩まで伸ばしたオカッパ風の髪型にクリクリッと愛らしい瞳と片エクボ、顧客から女子高生のアルバイトに間違えられても不思議はない。

古谷は礼を述べながら受け取った通帳を捲ってみた。通帳は当支店に着任したときに開設した積立金で本来は親睦費などに充てられる。個人の意思で引き出すことができ、また幹事に頼めば好きなときに解約できたので行員によってはヘソクリ口座と呼ぶ者もいる。むろん掛け金の多寡によって異なるが、事務管理部に頼んで給料から天引きされているので知らないうちに預金高は増えている。古谷も五年間の在職中、部下たちとの懇親会や冠婚葬祭のときに使ったくらいなので残高は一〇〇万円を超えていた。

会議室に移ってからは退屈しのぎに午後は外の景色を見て過ごす。その日の午後も古谷はきのうと同じように窓際に立っていた。眼下では車や通行人がせわしなく行き交う。つい先日まで自分もその中の一人だったのだと思うと感慨深い。そんな中、客待ちだろう、道路を隔てたホテル前のタクシーだけが四、五台、のんびりと停まっている。長い間、古谷は昨夜の出来事を重ね合わせながら去っては停まるタクシーの車列を眺めていた。そして閉店時刻が過ぎ、シャッターの降りる音を耳にしてからおもむろに顧客窓口へ向かった。

「いったい何にお使いになられるのですか、こんな大金」

窓口に残っていた小雪に積立金の解約を頼むと、小雪は目を丸くしながらも顧客向けの笑顔を絶やさなかった。たとえ預金のすべてが引き出されても解約だけは踏みとどまらせるように教育されて

いる。彼女の中で自分はすでに顧客の一人として位置づけられているらしい。そのあと口篭ったのは退職金が振り込まれる別口座の存在に気づき、顧客の減少にはつながらないと判断したからに違いない。

古谷は使途について語りたい誘惑に駆られた。過去を買うための契約金だと教えれば冗談だと思っても、いずれまた一緒に仕事ができると胸を躍らせてくれるかもしれない。だが、考えてみれば解約の目的は違ったが、きのうも同じ行動をしている。古谷は「時間ができるから家内を連れて外国にでも行ってみようかと思ってね」などと、きのうと同じように照れ笑いを浮かべながら小雪の童顔を見つめていた。

長かった最後の勤務が終わり、宴席に着いたのは六時半。送別会は支店に近い料理店で開催されたが、年度末とあって後任の支店長を含む四、五人が残業で出られなかった。それでも会場は若い行員たちの演出で盛り上がり、散会間際に小雪から花束を渡されたときには不覚にも目頭を熱くしていた。空車のタクシーを止めてくれたのも若い行員たちである。手を振る者、深々と頭を下げる者、古谷は見送りに出た連中の姿が見えなくなるまで後方を眺めていた。名古屋城への迂回を頼んだのはそれからである。昨夜の再現を期待する気持ちと、送別会の余韻とが胸中で交錯していた。

「あの、きのう、これと同じ花束が忘れられていませんでした？」

古谷は小雪から受け取った花束をルームミラーに映るように掲げて見せる。

「花束ですか」

運転手は信号待ちの間にチラッと後ろを振り返る。だが、キョトンとしていて、反応がないところを見ると客の顔も憶えてないらしい。契約金前払いの理由が理解できた気がする。一期一会の言葉が的確かどうかわからないが、おそらく運転手とって古谷は初対面、いま乗せている客がすべてで、その客に全霊を傾けているのであろう。

運転手は昨夜と同じコースを寸分の狂いもなく辿る。筋違い橋を折れたところから並ぶ車の車種までは憶えてないが、たぶん昨夜も同じ車が停められていたに違いない。二人で歩いた小道も同じ、ただひとつ交わした会話の一部が違った。

「一年で一万円なら一〇年ですと一〇〇万円ということですよね」

古谷は過去に値段を付ける運転手に挑むような口調で確かめていた。

「そうですね。そうなりますね。でも、そんな一昔前まで引き返されますと、それこそ過去で後悔されることになるかもしれません

よ」

運転手は過去を再生させると言い、その言葉に矛盾しているにも関わらず驚愕の表情をあらわにする。だが、それでも古谷が差し出す札束を慣れない手付きで内ポケットに忍ばせた。まとめて一〇年分を先払いする客は初めてだったかもしれない。

3

翌朝、古谷が起き出したときには娘の幸は朝食を済ませていた。今日から大学の春休みを利用して友人と旅行に出かけるらしい。高校生の息子はまだベッドの中、どちらも気楽なものである。台所で忙しくしている妻などは嫁いでこの方、義父母の世話もあって家を空けたことは数えるほどしかない。新婚旅行ですらわずか一泊でお茶を濁した。

「虫歯が痛むの？　忙しいのはわかるけど、早く治療に行かなきゃ」

下顎に手を当て、顔をしかめる古谷を妻が咎める。そういえば一〇年前の春先は歯を痛めていた。あいにく決算期と重なって治療にも行けず、どうにも我慢できなくて歯科医を訪ねたのは四月の半ばになってからだったと思う。ひとつひとつの記憶は曖昧だが、たとえば父親が亡くなったのは二年前、そして和室で経を唱えている母親が他界するのは三年後の年末と印象に残る事象に限っては鮮明に憶えている。

このころの古谷は県内でも最南端に位置する豊橋支店に勤務していた。新幹線を利用しても通勤には片道一時間半を要し、朝七時に家を出ると帰宅は深夜になるのも珍しくなかった。支店長の中では若手の部類に属し、それだけに血気に逸っていたところもある。むろん誰もが支店長に昇格するわけではないが、早い者で五〇歳前後、一般的には五〇代半ばがポストの目安になっていた。それまでの経験を活かし、昇格の早い者は本店、通常は二、三の店舗を渡り歩いたころに定年を迎える。後年、古谷が名駅第二支店に五年の長期に渡って在職したのは他にポストが見つからなかったからでなく、いわば飼い殺しの状態に遭っていたからにほかならない。

以前から融資基準の格付けなどを巡り、ときには本店との対立もあった。それは否定しないが、その年に金融再生法が施行され、古谷も本店の意向には逆らえなくなっていた。ところがある地元企業への融資で柄にもなく男気を出し、それをきっかけに本店、特に当時の審査部長との溝が深まったのは紛れのない事実である。

小西由夫が次長に伴われて支店長室に顔を出したのは四月の初旬。小西は市内に複数の店舗を出店するドラッグストアーのオーナ

ーで創業者でもある。苦労しているせいかなかなかの好人物で、同い年という接点もあり古谷にとっては気を許せる顧客の一人であった。

「実は小西さんが本日、当店へ見えられた用件はですね」

しばらく歯の痛みを堪えながら世間話をしたあと、次長が資料を広げながら切り出したのは融資話であった。バブル期に貸付けた資金は企業努力によって完済されているので今回は再融資の形になる。

「現在、決算処理をしているところですが、おかげで売上は堅調に推移しています。でも正直なところ、競合店の安売りや出店ラッシュで資金繰りは厳しさを増しています。私どもと致しましても新規店を開拓して、このあたりで攻勢に出たいと考えている次第です」

経営計画書を提示する次長の横から小西が額の汗を拭いながら口を挟む。遠慮してか小西が支店長室まで足を運ぶのは珍しく、客商売のわりに会うといつも汗を掻いていた。

「やはり次長の考えは再融資の方向ですか」

強引に押しかける客は別として、好感を抱いてなければ次長も顧客を支店長室までは連れて来ない。わざわざ確かめる必要もなかったが、古谷は平身低頭する小西を見送ってから次長に問いかけた。

「ええ、まぁ。財務面の脆弱性から格付けは六番目になっていますが、オーナーの堅実な考え方には共感できます。それにあぁした経営者は事業が拡大するにつれて顧客との距離が広がりがちになるものですが、あの方は連日、店舗間を駆け回って客の動向を探ってらっしゃる。あの熱意は買ってあげるべきではないかと―」

案の定、情緒的な側面は避けられないが次長は融資の方向に傾いていた。行内では一〇段階で取引先を評価しており、上位はこれまで同様だから気も楽だが、中位の五～六番目に格付けされた企業の扱いには最も神経を使う。

「あそこは全店、土地、建物ともに自社所有になっていましたねえ」

「ええ。だから資産価値の下落が多分に評価に影響しています」

「当行からの借入金は完済されたと聞きましたが他行との関係はどのようになっているのでしょう？」

「ここに過去五年間分の決算書が添付されていますが借入金は順調に返済されているようです。あえて気になるとすれば買掛金の増加くらいでしょうか」

次長はポケットから取り出した老眼鏡を掛け、ゆっくりとした動作でテーブルの上に広げられた書類に眼を落とす。老眼を冷やかすと、決まって「子供のころから目だけは良かったですから―」などと言い訳する。年齢は五歳上、だからといって横柄な態度を取るわけでもなく、当支店でのキャリアが長く地域事情に明るいので頼り

になる。ただ、いくらか温情的で、それが災いして支店長の声が掛からないのではないかと古谷は見ていた。

小西が希望する貸付額は支店長の権限枠を超えていた。額を下げる手もあったがそれでは期待する投資効果も得られず、古谷が意見書を添えて本店に審査を依頼したのは三日後になる。だが、通常は一週間もあれば回答が届くが、今回に限っては一〇日が過ぎても音沙汰はなかった。

その日のことは一〇年の歳月を経ても決して忘れていない。その日は閉店後、堪えていた歯の痛みに耐え切れず、仕事を抜け出して近くの歯科医を訪ねた。そして治療を終えて戻ってみると次長が青白い顔をして待ち構えていた。およその用件は顔色から察しがつく。小西の件だったら支店内の意見は一致している。誰に聞かれても構わないと思うが、行員の士気に関わるとでも考えてか次長は無言で古谷を支店長室まで連れて行く。

「小西さんへの融資の件、調整が難航しているそうです」

揃って支店長室へ入ると、座るのももどかしいのか次長は突っ立ったままで報せる。このあとも一年間ほど一緒に仕事をしたが、あとにも先にも憤慨する姿を見たのはこの一回に過ぎない。

「何か連絡があったのですか」

まだ麻酔が効いているようで、古谷は感覚が麻痺した口元を気にしながら確かめた。

「いえ、あまりに遅すぎるので、こちらから電話してみたのです」

「それで？」

「内緒で審査部の顔見知りから聞き出した情報ですが、担当者と課長が融資の方向で決裁を回したところ、その上の部長からストップがかかったそうです。却下はたやすいけれど、それでは重要な得意先を減らすことになりかねない。目下、課長たちが対策を検討しているようです。なんといっても小西さんとは長い付き合い、多額の定期預金までお願いしていますからね」

古谷が本店に出向いたのは翌日、次長から頼まれるまでもなく、あのときはスタンドプレーの非難も覚悟の上で出勤前に立ち寄った。呼び出された場合は別として、たとえ支店長であっても建前上、審査部への入室は禁止されている。とかく支店に勤務する者は顧客サイドに立ちがちで、さらに支店の格や都合など持ち込まれたら客観的な判断を担保できなくなるからである。

これが会議であったら直接エレベーターへ向かうが、とりあえず古谷は就業規則に則って受付に顔を出した。むろん受付の女性は古谷を知っていて癒されるような笑みを投げかける。一瞬考えてから、古谷は内線電話を借りて審査部につなげた。審査部は最上階の五階にある。しばらく待たされたあと、なぜか五階ではなく三階までエ

レベーターで上がってもらいたいとの返答が戻ってきた。
「支店長のことだから、もしかしたら怒鳴り込んでくるんじゃないかって、みんなで噂していたところですよ」
エレベーターの前で待機していた吉川がいきなり軽口を叩く。吉川は県の南部、豊橋を含めた東三河地域の審査を担当していた。十数年に及ぶ支店勤務の後に現在の部署へ移ったが、堅物揃いの審査部の中では年齢も若く異彩を放っている。
案内されたのは通路を隔てて法人営業部が見える応接室、ほどなく審査部の課長が現れてピタリとドアが閉められた。課長が顔を出したのは古谷への配慮だろうが部長は最後まで姿を見せなかった。
「用件は重々承知しています。そのうえで調整に手間取っている点を遺憾に思っています」
ソファに向かい合わせに座ると、何か言いかけようとする吉川を制し、課長がテーブルに額が着くのではと思われるほど深々と頭を下げる。職制が同じ課長から機先を制せられた格好の古谷としては同じように返すほかない。そのあと課長が重い口調で語った弁明は「部長」が「上の方」と言い換えられただけで、昨日、次長から聞かされた内容とほとんど変わりなかった。
「部長は小売業がお嫌いですからね」
課長が話し終わると、すかさず吉川が口を開く。なぜ彼が審査部へ引っ張られたか知らないが、いずれ支店に出されるだろうと直感的に思った。そして、その予感は一年も過ぎないうちに的中した。さらにあろうことか課長までが立て続けに異動させられたのである。
「ですが同社はこれまで返済金の遅滞など一度もなく、経営者の誠実な人柄も評価されていいのではないでしょうか」
決して感情に流されていたわけではない。ただ、みすみす重要な顧客との関係を壊したくない一心で古谷は無意識ながら自らの発言に力を込めていた。
「支店長の考えは十分に理解しているつもりです。ですから、あと少しの猶予をいただけないでしょうか」
同じ意見の課長を責めても意味はない。だからといって部長に直談判などすれば問題は余計にこじれてしまう。ここは課長の手腕に縋る以外に方法はなさそうである。このときの判断が将来に禍根を残すことになったとの思いが募る。だが、それがわかっていても別の手段に出られない自分を古谷は一方で認めていた。もし思い込みで方向を誤ったら、やり直しは利かないのである。
課長から電話があったのは古谷が本店へ出向いて一週間が過ぎたころであった。血の通わない書類の返送だけでは申し訳ないとでも考えたのであろう。電話が切れてからも、うなだれる課長の姿が

古谷の脳裏から離れなかった。

わざわざ本店まで交渉に出向いた古谷の立場も微妙になったが、それより次長の落胆ぶりが気になった。どうやら小西に融資を確約していたようである。先走った次長に非はあるが、古谷を信頼しての行為だろうから一概に責めるわけにもいかない。むろん思いとどまらせたが、辞職まで口にする次長を居酒屋へ誘ったのは週が替わってからだった。

「こんなことなら小西さんの経営するドラッグストア、無理にでも上位に格付けしておけば良かったですね」

酒を酌み交わしながらも次長の愚痴が胸に刺さる。顧客の格付けは毎年見直されており、それは財務諸表だけで判断できない要素を多分に含んでいた。それでも古谷は情状の入り込む余地を極力少なくするよう指導してきたつもりである。その功績もあってか、これまで支店の意向は例外なく反映されてきた。それが今回は過信につながったかもしれない。

「それで小西さんは？」

「先日お会いしましたが、やはり他行からの融資が決まったそうです。そのときは何もおっしゃいませんでしたが、近々当行の預金はすべて引き上げられると覚悟しなければならないでしょう」

返す言葉がなかった。本来は身勝手な企業論理を駆使してまでも預金の引き出しを阻止すべきであろう。だが、支店長として失格かもしれないが、これで小西は救われたといった安堵感のようなものが胸中に広がっていた。現に小西が率いるドラッグストアはその後、市内から郊外にも出店を重ね、経営基盤が安定したところでＭ＆Ａを仕掛け、五、六年先には他県にまで店舗網を拡大させている。むろん客として薬を買うことはあっても、この一件を最後に二度と小西と会うことはなかった。

小西の一件後も日々の業務は無難にこなしてきたが、たとえようのない虚しさを感じ始めたのは梅雨入り宣言が出されたころからである。気がつけば一〇年後にも使っている折り畳み傘を広げていた。長い間、下駄箱の隅に置き忘れられていた代物である。

こんなふうに仕事の結果はもとより、家族の将来、さらに家具や調度品などの寿命まで見えてくると日々の生活に向き合う気力は薄らぎ、一日一日を無為に消化しているに過ぎないのではないかと虚しさばかりが迫ってくる。それだけならまだ耐えることもできるが、自らの意思が錯綜を始めると、そのたびに胃のあたりがキリキリと痛み出す。こんなことなら一足飛びに定年後の生活に戻った方が生甲斐も見つけ出せる。いまさらなって「あとで後悔されますよ」と語った、あのときのタクシードライバーの忠告が思い出された。

「どこか体の具合でも悪いんじゃない」
食欲がなく、急に痩せ始めた古谷を見て妻が眉をひそめる。
「たいしたことはない」
古谷は強がって見せ、あいつは何をしているのかと妻の関心を息子に向けた。
「さあ、部屋で勉強しているんじゃない」
息子は翌年に大学受験を控えている。背伸びしすぎて受験は見事に失敗、一年間の浪人生活を余儀なくされるが、それを親として阻止すらできない。根拠のない助言などすれば反発は目に見えていた。
「いずれにしても一度、病院で診てもらったら―」
妻の執拗な危惧は無視した。だが、どうにもならなくて夏が終わりかけたころになって病院へ駆け込むことになる。診断は胃潰瘍、そのとき生まれて初めて入院生活を経験した。
いずれにしても結果がわかっていて、それを自分の意思で換えられない人生ほど虚しいものはない。一〇年待たないと、あのタクシードライバーには会えないのである。そんな中、もがきながらも古谷はひとつだけ過去に戻って良かったと思われることを発見していた。これから先、仕事に追われて顧みなかった妻をじっくりと見守って行くことで、もしかしたら定年になって宣告される離婚話は回避できるかもしれない。
ふと気づくと、誰もいないはずの隣のベッドから微かな寝息が聞こえていた。ほっと胸を撫で下ろし、古谷は再び深い眠りの中に舞い戻る。夢うつつで現在の自分の年齢を確かめるのも忘れていた。ただ、夢の続きは過去が早送りされたらしく、初めて海外へでかける二人のツーショットから始まっていた。

了